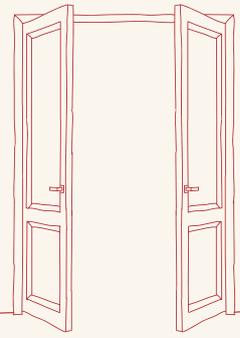


# 私のネクストステージ

—退職者への質問状—

Vol.36



## “他人のために”が自らの喜びになる幸せ



本山東本願寺（東山浄苑東本願寺）の山門



元厚生労働省職員

**小平 鉄雄さん (61歳)**

2019年3月定年退職

【おだいら・てつお】1958年、新潟県上越市出身。1981年大学卒業後、厚生労働省に入庁。以後、水道・廃棄物処理、食品衛生、精神保健福祉、介護保険などの高齢者福祉、難病対策、感染症対策、地域福祉などの業務に携わる。

—小平さんは国家公務員を定年退職後、僧侶になられたのですが、そのきっかけは何だったのですか。

50代の時、両親を亡くした際に喪主を務めたのですが、私は仏師のことを全く知らず、すべて近隣の皆様に教えていただきました。それがとてもありがたく、次は私自身が皆様の役に立ちたいと思い「浄土真宗大谷本願寺派 本山別院 本願寺真無量院」が開講している仏教学院「宗学堂」の東京学院に入学し、基礎から総合的に仏教を学ぶことになりました。とはいえ、その時点では僧侶になろうと思ってもいませんでした。

—では、定年退職後のプランはどのように考えられていたのですか。

具体的などは考えず、年金が支給されるまでは、退職金などを生活費に充てて質素に暮らせば十分と考えていました。ただし、再就職にも役立ちそうな資格は4代から自己研鑽のつもりでいくつか取得していました。

—宗学堂では、どのようなことを、どれくらいの期間、学ばれたのですか。

いわゆるお経を読む声明儀式作法や仏教学等を学ぶ「講義」、自宅での「レポート学習」、京都にある本山（東本願寺）で年中行事に参詣する「仏事奉仕活動」などを通して仏教について勉強しました。私は1年間の初等科専修課程の後、中等科専門課程に進んで2年間学び、修了した時点で家族や友人に勧められて僧侶になろうと決意しました。

—僧侶になるため修行をされたのですか。

宗派により異なりますが、私が学んだ宗派では、僧侶になるための修行というものはありません。これは、僧侶であっても欲望（煩惱）や苦しみは自らの計らいでは無くせないことを受け入れ、阿弥陀如来の御本願にすべてお任せし、仏となるという教えに基づくものです。「僧侶も俗人も仏の前では等しく平等」と教えられました。

宗学堂初等科専修課程で規程の単位を取得のうえ、各教科の実技・筆記・面接試験に合格後、「本山得度講習会」を受講すると、出家のための儀式である「得度」を受けることができます。とは言っても、同期約10名のうち、得度を受けない人もいました。

得度するには所属寺が必要となりますが、宗学堂初等科専修課程を合格修了すれば宗学堂の母体である本願寺真無量院に所属寺となつてもらえるため、私は本願寺真無量院所属の僧侶となりました。

—僧侶になつて以降、ご家族とは離れて暮らされているのですか。

普段は家族と共に東京で生活し、僧侶としてのお勤めが必要な時だけ本山のある京都に行っています。京都滞在中は宿坊に宿泊させていただいています。

—僧侶になられて、ご家族の反応は？

僧侶を志した時、妻と娘は手塚治虫の『ブッダ』や宗教専門書をプレゼントして応援してくれましたし、僧侶になったことを家族や

■ 年間の大きな行事

1月	修正会	8月	盂蘭盆会
3月	春季彼岸会	9月	秋季彼岸会
4月	花まつり	11月	報恩講



浄土真宗の開祖である親鸞聖人への御恩と感謝をこめて行われる「報恩講」



門信徒宅で読経を上げた後、僧侶として法話を行う

親戚は誇りに思っていると感じています。

——僧侶として、具体的にどのようなことをされているのですか。

2015年から本山での年中行事などに参加し、僧侶としての研鑽を積んでいます。通常は8時30分までに本山に行き（上山し）、僧侶としての身支度を整えたうえで、朝のお勤めや年中行事法要のお勤めを行います。御堂のお給仕をしたり、仏具を磨いたり、門信徒の願い出により読経を上げるなどして、夕刻のお勤めを終えた後、17時頃下山します。

その他の年間行事でのお勤めもあります。11月の報恩講では、雅楽演奏と念仏が一体となったお勤めや、たくさんのお僧侶が上半身を前後左右に激しく動かしながら念仏を唱える坂東曲があり、コンサートさながらのダイナミックさが味わえますので、ぜひ、皆さんにも見ていただきたいですね。

——僧侶として、やりがいを感じられるのはどんな時ですか。

仏法について話す「法話」を担当する時です。法話は準備の段階から緊張感が伴いますが、聞いてくださった方に意図が伝わり感謝された時は、やりがいを感じます。

また、本山内の廊下などで墓参りにお見えの方や門信徒の皆さんとすれ違って会釈を交わす瞬間は、僧侶となった自覚と責任を実感させられます。

——僧侶となられたことで、ご自身の中にどのような変化がありましたか。

自分より他人を優先すること、常に感謝することを基本に、世の中の事象に慌てず焦らず対応しようと努めるようになりました。

——何歳までお勤めされるつもりですか。

できれば一生続けたいと思っています。

——今後やりたいことは？

前職で東日本大震災の被災地対策の仕事に携わった経験から、被災地で復興支援をしている方々と協力し、僧侶の立場でできる支援をしていきたいと考えています。

——最後に、現役世代の読者へのメッセージをお願いします。

超高齢社会の日本で、僧侶の役割は葬儀だけでなく日々の生活の中でも求められています。「生老病死」に限らず人は様々な場面で苦しみ迷うことが必ずありますが、そのような時の答えや救いは、仏教の教えの中で見つけられるかもしれません。僧侶としての一助になればと思います。研鑽に努めています。他人のために何かをした時の喜びは、図り知れないものです。

皆さんもたまにはお寺に向き、声明や法話に耳を澄ませてみてください。そうすれば僧侶になりたくなくなるかもしれません。僧侶を志せば、それまでの人生経験が活かされるはずです。また、仏事を通して多くの人と関わることで、ご自身も様々なことに気付かされ、人生をよりよく生きていくことができるのではないのでしょうか。

——貴重なお話をありがとうございました。